調査・実践報告

新潟県立大学教育研究高度化推進事業シンポジウム「『アイデンティティの政治』再考——ジェンダー／セクシュアリティ、階級、文化表象を横断する」報告書（要旨）

Report on the Symposium: *Revisiting Politics of Identities, Intersections of Gender/Sexuality, Class, and Cultural Representations*

小谷一明[i]、ニッシャン・シャハニ[ii]、イオ・パーマー[iii]、丸山雄生[iv]、小池愉己[v]、近藤佑紀[vi]、荒木和華子[vii]

ODANI Kazuaki, SHAHANI Nishant, PALMER Io, MARUYAMA Yuki, KOIKE Yumi, KONDO Yuki, and ARAKI Wakako

1　はじめに

本研究は、「『アイデンティティの政治』再考：ジェンダー／セクシュアリティ、階級、文化表象を横断する」というタイトルで、2013年9月29日（日）に新潟県立大学（1313教室）において公開国際シンポジウムを開催した。本稿は、その後、シンポジウムでの報告内容を本誌に掲載するために各報告者の要旨をまとめた記録集である[1]。本シンポジウムは新潟県立大学教育研究高度化推進事業として2013年度採択され、研究者は国際地域学部の荒木他、共同研究者は小谷一明氏、福本圭介氏である。採択が決定してから数ケ月間にわたって、本シンポジウムの実行委員会を開催し、関心の高い学生も実行委員としてメンバーに加え、シンポジウム当日まで準備を行った。

プログラムは、三部構成で、第一部では学生と卒業生による個人の研究報告、第二部ではアメリカ合衆国でジェンダー研究に従事するインド人アクティヴィストと、多文化な背景を持ち芸術の理論と実践の統合を試みるアー

---

i　新潟県立大学国際地域学部教員
ii　ワシントン州立大学批評文化、ジェンダー、人種研究学部教員
iii　ワシントン州立大学芸術学部教員
iv　一橋大学大学院社会学研究科特別研究員
v　新潟県立大学国際地域学部卒業生
vi　新潟県立大学国際地域学部学生
vii　新潟県立大学国際地域学部教員

ティスト二人のゲストによる特別講演、最後にコメンテーターと報告者によるパネルディスカッションが行われた。

本タイトルの「『アイデンティティの政治』再考」とは、1990年代以降にアメリカ合衆国やカナダで展開された多文化主義の思潮における「アイデンティティの政治」を今一度考察する意義があるという認識に基づいている[2]。政治、文化、哲学、歴史学等の分野において用いられた多文化主義論争における著名な論者には、チャールズ・テイラー、エイミー・ガットマン、マイケル・ウォルツァー等がいる[3]。その後数十年が経過し、周知のようにジェンダー、階級、人種などのそれぞれの研究分野・分析枠組みにおいても大きな展開がみられるようになり、例えばジェンダー／セクシュアリティの分野ではクイア理論が地平を切り開いていると言える。共同研究者等はこれまで、人種、ジェンダー、階級に着目しながら、歴史あるいは文学上のアクターがどのようにそれぞれのアイデンティティを立ち上げ、闘い、政治を展開してきたのかについて考察してきた。今回のシンポジウムは、第一部第２報告（小池）のように、最先端の理論を机上の空論とせずに、例えば中学校や高校の教育現場でどのように応用しうるかについても考察するものであった。また、ニッシャン・シャハニ氏による特別講演の第１報告のように、現代史のなかにさかのぼり、ジェンダー／セクシュアリティの言説が生産／再生産されるプロセスを分析する文化研究からも考察を深めることができ、さらに、芸術家イオ・パーマー氏による特別講演の第２報告は、階級や労働といったテーマを芸術作品制作によって表象する実践的な研究から示唆を得るものであった。

報告者だけではなく、本シンポジウムの実行委員として準備に関わった学生たちも、事前に米国から招待した研究者の論文を読み、また関連テーマについて別室においてグループ・個人が研究した内容をポスター報告の形で展示する（休憩時間に移動して参加者が展示を閲覧し、意見交換をおこなった）など、準備において学ぶことが少なからずあった。そのような意味では、本シンポジウムの企画は、「教育研究高度化推進事業」の名の通り、「研究」だけではなく、「教育」的効果もあったのではないかと考えられる。

本シンポジウムは一般にも公開したため、特別講演者による英語での講演を開催者が事前に抄訳し、当日は、これらの日本語訳を印刷して配布することにより、多くの参加者が理解しやすい環境を整えた。またパネルディスカッションの質疑応答では、簡単な通訳も加えた。これらの準備には多くの

時間・労力を費やさざるを得なかったが、少しでも多くの参加者の理解の助けになったなら主催者として望外の喜びである。また主催者は新潟日報の取材を受け、シンポジウムの案内は新潟日報の文化欄において事前告知された。参加は遠く岡山県や茨城県からもあった。紙幅の都合上、要旨をさらに短くしてまとめることとなったが、当日参加できなかった方にも、このような報告書の形でシンポジウムの雰囲気をお届けできることになったので、要旨の執筆も引き受けてくれた報告者、講演者、コメンテーターに感謝する次第である。以下、要旨を報告順に記載する。（荒木和華子）

2　報告

２－１　偏見と暴力――マシュー・シェパード殺害事件から見るアメリカにおけるセクシャルマイノリティに対するヘイトクライム――

本報告では、ヘイトクライムの定義・統計・法律について紹介したのち、アメリカにおけるセクシャルマイノリティに対するヘイトクライムについて、1998年のマシュー・シェパード殺害事件を題材に、事件の起きたワイオミング州について触れ、事件のドキュメンタリー作品である『ララミー・プロジェクト』やマシューの両親の言葉を用いて考察した。

ヘイトクライムとは、従来の犯罪に「偏見」という要素が加わったものであり、人種や宗教、障がい、民族性、性的志向への偏見が元で引き起こる犯罪である[4]。FBIの犯罪司法情報サービス部が公表している2011年のヘイトクライムの統計資料によると、人種に対する偏見で起こった事件の被害者が最も多く、次いで性的志向、信仰、民族性、障がいの順である。1990年のヘイトクライム統計法制定以降、このような統計がとられ、公表され始めた。

2009年には、新たにマシュー・シェパード法が制定された[5]。マシュー・シェパードはセクシャルマイノリティに対するヘイトクライムの被害者の一人である。1998年10月、ワイオミング州ララミーで、彼はゲイバーから連れだされ、郊外に連れて行かれたのち、暴行を加えられ、フェンスに縛り付けられたまま放置された。翌日発見され、コロラドの病院に運ばれるも死亡した。

この事件発生直後に、ニューヨークの劇団員たちがララミーの住民たちにインタビューを行い、作成した『ララミー・プロジェクト』から、事件後の住民の様々な反応を見聞きすることができる[6]。多くの同性愛者が暮らしにく

い町であると感じていたララミーであるが、ホームカミングパレードではシェパードのために多くの人々が行進した。その一方、葬儀会場前にはゲイバッシングを行う人々が集まった。そして、犯人の友人は「僕たちはこの社会の産物だよ。」と発言しており、人々は生まれ育った社会や環境を問題視している。その社会で「憎悪」が「犯罪」となってしまった。

2009年10月28日、マシュー・シェパード法が署名された際、シャパードの母は以下のように語っている。「とりわけ攻撃され続けている、自らのライフスタイルを単に包み隠さず正直に生きているヘイトクライムの犠牲者とその家族のために、連邦議会と大統領がこの一歩を踏み出してくれたことに、私たちは大変感謝します。」[7] 彼女はヘイトクライム被害者のことを「自らのライフスタイルを単に包み隠さず正直に生きている人々」と言い表している。これは被害者の中でも特にセクシャルマイノリティに当てはまる表現ではないだろうか。一般的にヘイトクライム被害者は見た目で判断できる特徴から、偏見の対象とみなされ、被害に合うことが多い。肌の色を隠すことはできないが、性的志向や性自認などは隠すことができ、隠されていれば、見た目から判断することはできない。このことからセクシャルマイノリティに対するヘイトクライムの特異性が窺える。

セクシャルマイノリティに対するヘイトクライムは、シェパードの事件以前から存在していた。それにも拘わらず、シェパードの事件が人々の注目を集め、法律の名前にまでなったのは、シェパードが「白人」の「中産階級」の家庭で育った青年であることが大きな理由であると本シンポジウムのニッシャン・シャハニ特別講演講師が指摘した。本報告では「セクシャルマイノリティに対するヘイトクライム」をテーマに考察したが、単に「セクシュアリティ」の問題だけでなく、「人種」や「階級」の問題が複雑に絡み合っている。そして、人々を苦しめている偏見は「ヘイトクライム」という物理的な暴力として表れているだけでなく、日本でも近年過激化する「ヘイトスピーチ」としても表されている。（近藤佑紀）

2－2　あなたの隣の大切な人と～身近なセクシュアル・マイノリティ当事者との向き合い方を考えるワークショップ～

本発表の主旨は、家族や友人などのごく身近な存在の中にもセクシュアル・マイノリティ当事者がいることを認識し、身近な存在であればあるほどありのままを受け入れてほしいことを知ってもらうものであった。

発表後に匿名でアンケートを実施したなかで、発表者が今後の課題だと感じたことは2つある。

1つは、当事者の「家族にまつわる悩み」をもっと聞きたいという意見があったことである。今回伝えたかったことの１つに、家族のような身近な存在であればあるほどカミングアウトは困難になりがちであるということがあったが、セクシュアリティによっては、「同性結婚が認められない」、「パートナーとの間に子どもを作ることができない」など、多種多様な悩みがあるということである。これはアンケートの中でも指摘されていたことだか、その指摘は的確だと言える。なぜなら、これらの悩みは、場合によってはカミングアウトよりも深刻なものとなりうる。また、より深い当事者の悩みを理解することで周囲の理解も深まるだろう。理解が深まるにしたがって、シンポジウムの質疑応答でもあったように、「セクシュアル・マイノリティ当事者がメディアに出るときは、トリック・スターのポジションに限る」というお笑い要素なしで当事者を見ることができると思う。

今後機会があれば、当事者の悩みについてより深く話したい。

もう1つは、「受け入れる姿勢は大切だけど、自分は受け入れられるかどうかわからない」、「どうしても受け入れられない」という声にどう答えるかということである。発表者はワークショップの中で、「もし家族や友人、恋人がセクシュアル・マイノリティ当事者だったらどう感じるか。どのような行動に出るか」という質問を投げかけた。

また人気海外ドラマ『グリー(glee)』の中から、ある女子生徒が祖母にレズビアンであることを告げるシーンと、彼女を「『普通』にしてやる」と絡む男子生徒を、グリー部の女子生徒全員で追い払い、パフォーマンスを披露するシーンを比較し、「受け入れる」という1つの形を示した。

しかし、前述の質問の際も、『グリー(glee)』の映像を見せたあとも、「カミングアウトされたら、どう接していいか分からない」、「今までと変わらないように接してほしい、というのは難しい」、「カミングアウトされたが、驚いて受け入れられなかった」、といった意見がみられた。これは、受け入れるということがどのようなことか、きちんと説明できず、受け入れる心構えを話すことで、カミングアウトをされる側の気持ちを整理できなかった発表者の落ち度であり、同時にメディアや社会が作り出した、「セクシュアル・マイノリティは、病気・特殊な趣味を持った人々。『普通の』人たちとは遠い存在である」という認識の強さが覗える。その結果、受け入れたいと

感じても、「受け入れる必要はない」という空気に圧倒されてしまい、結果、受け入れることがますます困難になっていくのではないだろうか。

発表者はまだ、カミングアウトをされる側の「受け入れられない」という声に対する答えは見つけていないが、研究を重ね、いつか回答を出したいと思う。

以上、2つの課題について述べることで報告としたい。（小池愉己）

3　特別講演

3－1　Queer "Retrosexuality": The Historical Possibilities of Queer Retrospection

My book *Queer Retrosexualities: The Politics of Retrospective Return* (Lehigh University Press, 2012) undertakes to examine the retrospective logic that informs contemporary queer thinking; specifically, I analyze the narrative return to the 1950s in post-90s US queer culture. I call this retrospective return "queer retrosexualities"—a mode of thinking that performs a radical revisioning of queer history, knowledge production, political memory, and activism.

In returning to the past, queer retrosexualities complicate the assumption of future projection that marks traditional utopian thinking. This project, however, is not intended as a revisionist account of the 1950s or pre-Stonewall citizenship from a queer perspective. Rather than re-thinking history, *Queer Retrosexualities* is more invested in re-thinking historiography. The retrospective return to the 50s allows queer thinking to move away from the commodification of queer culture in the present that masquerades as progress; instead, the return to the 50s offers queer thinking a possibility of working through the reparative possibilities of exile. Thus even while it seems perversely counter-productive to return to a historical moment that is marked by the persecution of sexual and racial minorities, I show how it is the shared relationality produced by the exile of shame that subtends the reparative value of queer retrosexualities. If commodification and queer visibility characterize the present moment, then a return to the 50s functions like a traumatic flashback that ultimately disrupts the complacency (and illusion) of progress.

The return to the fifties in these texts is obviously not "nostalgic" in its common sense meaning, given the conformity that informs US history during this

decade. I don't mean to suggest that gays and lesbians wish they were living in the conservatism of the 50s; neither am I suggesting that these texts uncover hidden radical possibilities in the 50s that have been ignored or suppressed. Instead, queer retrosexualities reveal a contradictory logic through which queer subjects navigate dominant structures without necessarily relinquishing the stigma that attaches itself to their persecution. The return to the 50s takes us back to the very crux of the term "queer"—the embracing of a derogatory term to redefine it.

In terms of textual representation, queer retrosexualities refer to myriad formal narratives—meta-textual allusions to literary characters, references to actual political figures from the 50s, and narrative flashbacks to the decade. Ironically, even while these texts make the 50s a primal scene on account of the decade's prohibitive powers, by retrospectively embracing the productive nature of these prohibitions, these works contribute to the project of re-thinking the events of Stonewall as the singular epistemic moment of gay liberation. While I look primarily at post-Stonewall queer fiction that makes the 50s its primal scene—Sarah Schulman's *Shimmer*, Mark Merlis' *American Studies*, Michael Cunningham's *The Hours*, for example—I also examine a wide variety of mediums such as the memoir, film, and art, (Samuel Delany's *The Motion of Light in Water*, Todd Haynes' *Far from Heaven*) to illustrate the reparative potential of queer retrosexualities. For example, in my chapter on Mark Merlis' American Studies, I analyze how the novel does not merely stop at de-scribing the field from which it takes its title but actually rewrites the "founding" moments of the field—a rewriting that marks the reparative potential of Merlis' text. By retunring to the 50s, Merlis not only exposes the heteronomative exclusions that informed the beginning of American Studies, he also suggests how a radically differ-ent understanding of retrospective temporality could facilitate the creation of queer spaces within the contemporary practice of the field.

In grappling with the historiographical implications of this return to the 50s, *Queer Retrosexualities* contributes to and furthers some of the dynamic work being done on the politics of queer time. The texts that I examine interpret queer retrosexualities as a structure of feeling or a mode of thinking that dwells in twilight memories, nostalgic returns, and forgotten archives. These texts reveal that it is obviously not the material and historical realities of McCarthyism or Cold War years that offer any utopian promise for queer thinking; instead, it is the retrospective return to this politi-

cal milieu that enables queer thinking to perform an imagined community in the past through the intimacy of shared exile. By returning to the conservative 50s, queer retrosexualities re-create a moment for the present when the threat of queerness could not pass as normal under the pretense of gay assimilation. The retrospective return to the 50s allows queer thinking to move away from the commodification of queer culture in the present that masquerades as progress. Thus *Queer Retrosexualities* theo-rizes how traumatic history becomes a valuable resource for the political project of assembling collective memory as the base materials for imagining a different—and more queer—future. (Nishant Shahani)

3－2　Access/ Excess

Current creative work consists of "tapestries" constructed from cheap and humble materials found at hair care, hardware and sewing stores. I obsessively sew, pin and glue these items (anything from fake nails to hair pins to steel washers) onto painted canvas to create elegant, chintzy and lavish surfaces. The composition of these bought notions are inspired by the systematic, tightly controlled patterning of couture dresses and aerial images of recent uncontrolled oil spills. These exaggerated manifestations of human excess fuel the formal decisions of my work. Tapestries are then backed onto curved wooden panels that extend out from the wall and sprawl across the floor reminiscent of scaffolding or wooden platforms.

By using underprivileged materials to create elaborate hand sewn constructions, this work comments on issues of high and low class societal patterns, production and consumption. Specifically, by referencing the tense and at times incongruous relationships that exist between classes, my work often takes an ironically romantic look at societal excess as seen through consumer product and environmental disasters. Drawing from a range of disparate resources, this work also focuses on how social divisions operate both in tandem and at odds with one other.

Issues of labor are an underlying and important component in my work. Appropriating tools associated with menial labor, repetitive drawing, pinning or sewing points to labor as a critical yet arbitrarily valued element within capitalist modes of production. Labor is the force that cleans up large spills to give order to the unmanageable. And labor is what drives and forms high end couture garments only accessible to very few.

Excess within society manifests in different ways and offers inspiration for creative work. Current work offers an opportunity to engage in contemporary consumer culture by researching specific grooves within society--systems of control meet unrestrained excess. Polluted waterways and beaded crystal garments find their way into and clash together in recent work. Uncontained oil spills show this excess of society and labor force (in this case the cleanup crews) work as a way to contain something that is often unmanageable. This work borrows from these moments when society shows its fullness- it's unbridled opulence and its exaggerated overabundance then refashions these developments into concrete visual forms that morph between cultured sophistication, industrial work and gaudily dressed up camp. (Io Palmer)

4　コメント報告

2013年9月29日の新潟県立大学教育研究高度化推進事業シンポジウム「『アイデンティティの政治』再考――ジェンダー／セクシュアリティ、階級、文化表象を横断する――」は三部に分かれ、刺激的な報告と討議が行われた。以下、コメントの概要を各報告ごとにまとめる。

第一部では、二人の学生の報告があった。新潟県立大学2期生の近藤佑紀さんによる「偏見と暴力－マシュー・シェパード殺害事件から見るアメリカにおけるセクシャルマイノリティに対するヘイトクライム」は、1998年にワイオミング州で起きた同性愛者の殺人を例に、セクシュアリティを理由にしたヘイトクライムの現状を分析した。事件の背景にあったのは中西部の小さな町の保守的な風土であり、青年の痛ましい死をきっかけに反差別の動きも強まるが、嫌悪や無関心や連帯などさまざまな反応がからまりあう。ヘイトクライムの根深さと取り組みの難しさは、嫌韓デモなど排他的な考えが目立つ日本においても重大な問題であり、それに向き合う視点を示した点で今日的な意義のある報告だった。

新潟県立大学1期生の小池愉已さんの「あなたの隣の大切な人と―身近なセクシュアル・マイノリティ当事者との向き合い方を考えるワークショップ」は、発表者による問いかけと参加者の応答を通して、多様化するセクシュアリティについての理解を深めることを目指した。セクシュアル・アイデンティティを「ありのままに」受け入れることへの戸惑いを参加者から引き出した小池さんのプレゼンテーション技術は見事で、全体を通して浮かび上

がったのは、日本ではセクシュアル・マイノリティの受容が進んでいるが、その役割は限定されており、正常と異常を分ける境界が残っているという課題だった。

第二部は、ワシントン州立大学から招かれた二人のゲストによる特別講演だった。ニシャン・シャハニさんの「Queer "Retrosexuality": The Historical Possibilities of Queer Retrospection」は、クイア理論を用いた歴史への新しいアプローチを示した。アメリカの1950年代は、戦後の繁栄のなかで郊外住宅と専業主婦のような家族神話が頂点を迎えた時代だったが、一方で同性愛は共産主義と同様の非米行為として弾圧された。正しいものと望ましくないものを分ける同化と排除のメカニズムに注目するクイア理論は、同性愛者などの奪われた歴史を回復し、スティグマとされてきた否定的な経験を中核としたアイデンティティの確立を目指す。50年代を美化するノスタルジアではなく、トラウマ的な困難な過去を受け入れる「レトロスペクション」を提唱するシャハニさんの方法論は、歴史の忘却や神聖視に対抗し、無垢な過去に対する内省を促すものだった。

大学で教鞭を執りつつ、実作も手がけるイオ・パーマーさんの「Access/Excess」は、自作の制作意図や芸術哲学を説明した。ウィッグから掃除用具にいたる多種多様な素材と、写真やインスタレーションなどいろいろな表現手段を組み合わせたパーマ—さんの作品は、個人と社会の関係を何重ものメタファーとして表していた。とくに2010年のメキシコ湾原油流出事故に関するプロジェクトは、「清掃」をキー概念としてグローバルな資本主義における人種、階級、ジェンダーの格差を問うており、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故以後の日本にとって、とくに柏崎刈羽発電所の再稼働をめぐって議論が続く新潟にとって学ぶところが多かった。流出した原油や放射能は「汚染水」のように穢れであり、その存在は隠蔽されてしまうが、見えない問題を顕わにし、安定した構造の不安定な土台をむき出しにするアートの意義が説得的に語られた。

多文化主義の時代における「アイデンティティの政治」の再考にあたって、抽象的な概念を具体的な例に適用することで、各報告は眼前の現実を捉えるための実り多い議論を提供した。日本とアメリカ、学生と研究者、過去と現在など幾多の境界を交差した本シンポジウムは、よく準備された報告と、参加者の熱意により、きわめて有益なものになったと言えるだろう。（丸山雄生）

５　「クイア『レトロセクシュアリティ』：クイア的回顧の歴史的可能性」
～「恥」を抱きしめるという政治学～

シャハニ氏の論考で、最も印象に残った論点について述べたい。それは「恥」に基づく歴史の読み直しとその意義である。シャハニ氏はSF作家サミュエル・R・ディレイニー（Samuel R. Delany）の回想録『水中での光の動き』（*The Motion of Light in Water*, 1988）に言及し、以下のように述べている。

> 回想録にはディレイニーが目撃した浮浪罪を取り締まる警官の襲撃場面があります。もちろん恐怖をもって語られるのですが、襲撃時にものすごい数の人間が闇から突如、現れました。この大衆の出現を彼は喜びをもって描いています。……つまり警察の襲撃といった制御がいかに生産的であったかをディレイニーは示したのです。「お前は孤立している」という単数形の声が、共同体的な「私たち」によって取って代わられました。逃げていく大勢の人を目撃しながら、恐怖と歓喜の中、この実感が生まれました。

上で述べられている赤狩りの時代、1950年代の警官によるゲイ襲撃事件は、彼らに「孤立している」という感覚をさらに埋め込むために行われた。しかしこの襲撃現場では、「親密な空間を創出させた逃亡の共同体験」が生まれていたのである。孤立を深めていた者同士が結びつくことの可能性を感じた「歴史」。ここで強く印象づけられたシャハニ氏の指摘が、イヴ・セジウイック（Eve Sedgwick）の言う「恥」（shame）を共に抱きしめつつ、新たな希望を編み出す観点である。疎んじられる歴史のなかにこそ「恥」を感じる契機があり、それが孤立ではない共生・解放といった未来構想を準備するというものである。つまりシャハニ氏の言う「回顧のクイア政治学」である。

こうした闇夜に突如として現れた「私たち」の物語は、私に映画『ハーヴェイ・ミルク』（*The Times of Harvey Milk*, 1984）を思い起こさせた。ゲイであることを公表して当選したサンフランシスコの市会議員ハーヴェイ・ミルク（Harvey Milk, 1930-78）が、当選の年に射殺されたときのニュース映像が、ディレイニーの描く「喜悦」と結びついたのである。映像ではミルクの訃報を悲しみ、市庁舎や周辺の通りに予想を超える数の人々が集まっていた。

公共の場を占める人々の多さは、強いられる孤立を越えて静かに人が集う「驚き」を、集まった当事者自らに抱かせている。バッシングの過去を見つめて感じる「恥」が、陸続と通りに出るという「ユートピア」を現出させるのである。（小谷一明）

---

1 なお、詳細の記録集については別途報告書を発行するので、そちらを参照されたい。
2 もっとも、早くは1970年代のカナダの政策理念として用いられていた表現である。辻内鏡人、『現代アメリカの政治文化—多文化主義とポストコロニアリズムの交錯』（ミネルヴァ書房、2001年）、100頁。
3 チャールズ・テイラー他編『マルチカルチュラリズム』（岩波書店、1996年）
4 FBIはヘイトクライムを以下のように定義している。A hate crime is a traditional offence like murder, arson, or vandalism with an added element of bi-as. For the purposes of collecting statistics, Congress has defined a hate crime as a "criminal offense against a person or property motivated in whole or in part by an offender's bias against a race, religion, disability, ethnic origin or sexual orientation."
5 正式名称は"Matthew Shepard and James Byrd, Jr. Hate Crimes Prevention Act"である。性的指向、性自認、障害を理由とした犯罪がヘイトクライムとして規定された。
6 Moisés Kaufman, *The Laramie Project* (New York: Random House Inc, 2001).
7 Joel Schwartzberg, "Gays Gain Protection from Hate Crimes: Insight from Judy Shepard," *Now on PBC*, October 28, 2009.